

チーム学校に向けた現代的課題 (2) —生徒指導的観点から—

片山 紀子・角田 豊・小松 貴弘

The Current Task of “School as a Team” (2)
—From the Perspective of Student Guidance—

Noriko KATAYAMA, Yutaka KAKUTA, Takahiro KOMATSU

Accepted April 13, 2017

抄録 : 2015 年、関西地区および九州地区にある 2 つの教育委員会を通じて、教員および保護者に対して生徒指導上の現代的課題を明らかにするためのアンケート調査を行った。本稿は、そのうち自由記述で回答がなされた部分を取り上げ、検討を行ったものである。現在、学校現場では、教員の多忙化の問題が深刻化する一方で、子どもの貧困の問題も拡大している。これらの問題にそれぞれ対症的に対処するのでは解決しない。そこで、教員と保護者間の相互理解を深める方策が必要であり、そのための具体的な場と機会を作り出すことが、喫緊の課題だといえる。教員および保護者間に不必要な齟齬が生じることを避け、チームとしての学校を目指すには、両者の間に「対話」が不可欠である。

索引語 : チーム学校, 生徒指導, 教員, 保護者, 対話

Abstract: In 2015, a questionnaire survey to clarify the contemporary task of student guidance to teachers and guardians was conducted via the boards of education in the Kansai and Kyushu areas. In this article, we examine the section of the survey in which free description replies were made and provide further insights into these responses. Today, at the school sites, teachers' heavy workload is being aggravated and the problem of poverty for students is increasing. However, these problems cannot be resolved by superficial approach. Therefore, measures to deepen the mutual understanding between teachers and guardians are required, and assigning a concrete place and opportunity for so doing is an urgent matter. In order to avoid unnecessary disagreement between teachers and guardians, dialogue is indispensable to ensure that they work as a team in the school.

Key Words: school as a team, student guidance, teachers, guardians, dialogue

1. 課題設定

2015年12月21日に中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」が出されたことにより、今日の学校はチーム学校というキーワードのもと、パラダイムシフトが迫られている。そこで、現在の学校において、チーム化にどのような課題があるのか、生徒指導的観点から検討することとした。

片山・角田・小松（2017）は、すでに教員及び保護者を対象としたアンケート調査を行い、統計処理の可能な質問項目に関しては、分析および考察を行っている。その結果を概括しておく、（1）教員と保護者との意識には、生徒指導上いくつもの点で差異が見られた。さらには教員と保護者との間に生じた問題の処理の仕方等についても異なった見解であることがわかった。（2）経験5年未満の若年教員の意識は、それ以上の経験を積んだ者が保護者に対して厳しい見方をするのに比して肯定的に捉えるなど、いくつもの点で差が見られ、その差は歴然としたものであった。（3）小学校教員と中学校教員の校種による違いを見ると、自信が持てないでいる教員は、中学校より小学校の教員に多く見られた。（4）男性教員と女性教員を性別に比較すると、多忙感については、小学校では男性教員より女性教員の方に強く、中学校では女性教員より男性教員の方に強い傾向があった。また、保護者に協力してほしいと考えているか否かについては、小学校では女性教員の方に強く、中学校では男性教員の方に強かった。さらに教員として自信があるか否かという点で見ると、男性教員の方が女性教員よりも自信があるという結果であった。

本稿においては、前報（片山・角田・小松、2017）で取り上げることでできなかった記述部分について考察を行うこととした。教員および保護者に対して、周りからどのような支援があるとよいのかを記述式で回答してもらったものであり、得られた回答を言語データとして分析していく。分析の観点は、教員と保護者の間の齟齬の原因はどこにあるのか、およびチーム化に向けての障壁となっているものは何かである。

2. 調査方法

調査は、2015年10月～2016年1月にかけて、関西圏にある都市部のA市及び九州の田園部に位置するB市の2つの市において、教員522人（内271人から回答：回収率52%）、保護者1415人（内750人から回答：回収率53%）に対して行った。

本稿では自由記述で回答した部分について検討を行った。自由記述の質問項目は、A.「今の『学校』にどのような支援があるとよいと思いますか」とB.「今の『家庭』にどのような支援があるとよいと思いますか」である。

3. 結果

アンケートの自由記述の内容を、（1）教員用アンケートの質問Aに対する自由記述（以下「教員・学校支援」と記す）、（2）教員用アンケートの質問Bに対する自由記述（以下「教員・家庭支援」と

記す)、(3) 保護者用アンケートの質問Aに対する自由記述 (以下「保護者・学校支援」と記す)、(4) 保護者用アンケートの質問Bに対する自由記述 (以下「保護者・家庭支援」と記す) の4つのカテゴリーに分けて、順に結果を整理した。結果の整理にあたっては、まず回答内容の出現頻度に注目して、頻度の高い回答内容をまとめた。そのうえで、今回の調査の趣旨に沿って、出現頻度は高くなくとも、注目に値する回答内容を抽出した。以下、■が回答内容であり、(小)(中)は、教師の場合は在職校種を、保護者の場合は子どもの在籍校種を示している。

(1) 教員・学校支援

このカテゴリー内の回答(質問項目A.「今の『学校』にどのような支援があるとよいと思いますか」に教員が答えたもの)を、i) 教員の増員、ii) 教員に対する相談・研修、iii) 教員以外の多様なスタッフの配置に分けて整理した。

i) 教員の増員

教職員の増員、支援員の増員など、人的支援を求める意見が圧倒的に多い。以下に、代表的な回答の例を抽出して示す。

- とにかく人手不足である。クラスの人数も多く、支援の必要な子も多いが、担任一人では手が回らないことが多い。クラスの人数を減らすことと、教員の数を増やし、支援の必要な子供へのサポートを行うことが必要(小)。
- 教員が授業をすることに集中できるための支援。給食指導や掃除指導、宿題のチェック、提出物作成に時間や労力をとられず、授業の準備や授業だけに集中できる人的、時間的支援です(小)。
- 特別支援が必要な子に対する専門性のある教師の育成が必要だと思います(小)。
- コンピュータの処理速度で便利になったことがある反面、昔よりも事務仕事が増えたと感じる。子どもたちも支援の必要な子が増え、保護者対応も多くなった。教員数が少子化で減らされようとしているが、子どもをきめ細かく見ていくためにはもっと教員が必要(中)。
- 教師の負担が増えすぎです(何でもさせられている、朝7時くらいから夜9時まで)。自分の家族をほったらかしにして仕事をさせられている感じがする。対応できる人数を増やし、リフレッシュする時間の確保を(中)。

児童生徒との関わりをきめ細やかに行うために、クラスの少人数化や複数担任制、あるいは副担任制の強化、小学校での一部教科の教科担任制といったことを求める声が多い。

特別な支援を要する児童生徒への専門的な技量を持った教員の配置、個別の支援や対応ができるスタッフ、あるいは教員がそうした支援を行う際にそれをバックアップするスタッフの増員や配置を求める声は、とりわけ小学校教員の間で多い。

過大な業務が心身の健康や家庭生活にマイナスの影響を及ぼしていることをうかがわせる記述は、とりわけ中学校教員に多い。「もうすぐ過労死するのでは・・・(中)」といった切実な回答もあった。

ii) 教員に対する相談・研修

教員が悩みを相談できる機会、教師としての力量向上のための適切な研修を受ける機会への支援を求める意見である。

- 教員がかかえている悩み事や相談事を相談できる機関など（小）。
- 特に、教育的に課題をかかえ、解決は困難な子がクラスにいる場合（特別に支援が必要な子）担任を支えていく支援体制づくりが必要。担任が問題を抱え込まないように（小）。
- 若年教員の授業・行事のほか、教員活動全般の支援（小）。
- 教諭や講師を含め、メンタルを支えたり、安定させたりできるようなもの（ストレス疲れ多し）（中）。
- 特別な支援が必要な子どもについて正しく理解できている者がまだ少ない。旧然たる固定概念で対応しようとする者もまだいる。今後もさらに多くの教員に知識を深める研修などの機会が増やされるべき（中）。

iii) 教員以外の多様なスタッフの配置

教員以外のスタッフの配置、および増強を求める回答である。

- 栄養教諭の採用を増やしてほしい。全校配置になってほしいと思います（小）。
- 専任の図書教諭を配置する（小）。
- 養護教諭の複数配置をより増やすこと（小）。
- スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等、専門職の出勤日を増やす（小）。
- 放課後の時間、部活に入っていない（休みの時など）生徒に勉強を見てもらえる方がいて下さると有難いと思います。週に1回～2回はあるのですが、毎日来てもらって支援していただけると有難いです（中）。

(2) 教員・家庭支援

このカテゴリ内の回答（質問項目 B.「今の『家庭』にどのような支援があるとよいと思いますか」に教員が答えたもの）を、i) 気軽に相談できるシステム、ii) 経済的支援、iii) 保護者の家庭教育力向上のための支援、iv) 地域とのつながりを深める支援、v) 子育てに配慮した労働環境、vi) 学校とのつながりを深める工夫、vii) 児童生徒と保護者とのつながりを深める支援に分けて整理した。

i) 気軽に相談できるシステム

最も多かった意見は、保護者が子育てについて気軽に相談できる、悩みを聞いてもらえる場や人を求める声であった。

- 子育てや学習についてアドバイスできる（気軽に）人の支援があるとよい。スクールカウンセラーより、もっと身近な人の存在が必要（小）。
- 昔でいう近所のおばさんのような気軽に話ができ相談にも乗ってもらえるような相談員の配置（小）。
- 特に子供のことで悩まれて1人で悩まれている保護者がいる場合、話を聞いてあげられる人の存在が必要である（中）。
- 子育てに悩む保護者のための SC の増加（中）。
- 支援員の方の訪問活動があつていろいろなことを相談できる状況をつくる必要がある（中）。

ii) 経済的支援

経済的な支援を求める声であり、経済的格差により進路の格差が拡大することを懸念する声が見られた。

- 経済的に苦しい家庭が増えているので、子どもたちにその影響が出ないような国の施策があるとよい。経済力が教育格差につながるのは、非常に大きな問題だと思っている (小)。
- 大学へ通えるように奨学金 (返却不要) 制度 (小)。
- 経済格差がそのまま学力格差につながっているような気がします。具体策は思い浮かびませんが、何か手だてをうたねば…と思います (小)。

iii) 保護者の家庭教育力向上のための支援

保護者が保護者として適切に子育てを行うための教育を求める声である。

- 食事を十分にとっていないこどもが増えています。家庭へのアドバイザー的な人が地域にいればよいと思います (小)。
- なかなか家庭に立ち入ることは難しいが、基本的生活習慣が確立されていない家庭へ、学校とは違う立場で関われる人材等 (小)。
- 核家族化が進む中、子育てで孤立している家庭が多いように思われる。子育てアドバイザー的な支援が必要 (中)。
- 経済格差、教育への関心など、いろいろ問題があると思いますが、ご家庭で、特に教育への無関心は気づいていないような気もします。アドバイザーのような役職が、家庭を訪問し、的確なアドバイスをして頂くと良いのでは…と思います (中)。
- 子供目線に立って共に考えていけるような、親の姿勢がほしいと思います。保護者の質の向上が必要だと思います。家庭教育の充実 (中)。

特に中学校教員の声として、教育の意義についての保護者の理解を促す必要性を指摘する回答が目立った。

iv) 地域とのつながりを深める支援

保護者がゆとりを持って子どもとかかわり合い、対話ができる機会づくりを地域に求める声が多く見られた。地域の中で保護者が孤立することを防ぎ、保護者同士が繋がることを促し、子どもが地域の複数の大人に見守られる必要性などを指摘する声があった。

- 多くの目で子どもたちを育てていけるように、地域の協力が必要 (小)。
- 保護者の時間的・経済的余裕。「親子の集い」のような親と子がかかわれる催し物を行う (小)。
- 保護者同士の横のつながりが深められるような場をつくること (小)。
- 異年代 (小～大まで) を対象にして、学習や生活 (食事づくりや集団のルール等) の体験ができる地域のコミュニティサークル (中)。
- 地域の活動、地域対抗の運動会など、人と人をつなぎ、子ども、地域で見ていくとりくみ、子どもと大人のかかわりを増やす。子ども同士のつながりを持つ (中)。

v) 子育てに配慮した労働環境

保護者の働き方をめぐって、子育てに時間を割ける労働環境づくり、仕事をしている間子どもを預かってくれる施設の充実などを求める声があった。

- 遅くまで働く保護者のために子どもを預かってくれる施設がもっとあれば（小）。
- 子育てに配慮した職場環境を整えること（小）。
- 子どもの教育にしっかりかかわれるような、社会的制度（産休・育休）が実施されること（小）。
- 家庭と地域がつながるような支援があるとよいと思います。共働き家庭が安心して子育てができるように、保育や放課後のサポートの支援があるとよいと思います（小）。
- 親は子供にかかわる時間、余裕に欠けるケースが多いと思う。親の働き方、生活を変えていく（中）。

vi) 学校とのつながりを深める工夫

学校と家庭の関係では、学校の方針や連絡が家庭にもっと伝わるように情報共有のための手だての工夫の必要性を指摘する声があった。

- 学校教育への参画の機会（小）。
- 学校との情報の共有（小）。
- 学校の方針やきまりなどを詳しく知ってもらふ。宿題なども出しているので知ってもらふことが大切（中）。
- 学校の情報開示（日々の取り組みや生徒の実態など）（中）。

vii) 児童生徒と保護者とのつながりを深める支援

子どもと保護者のかかわり合いの薄さを懸念する声である。

- 家庭の事情により、我が子と接する時間が足りない家庭があるように感じます。（中略）忙しいことを理由に子どもの心を理解できていない家庭もあります。学級通信や家庭への電話連絡で、「今、大切なこと」を常に知らせていますが、家庭でも子ども達との心の交流ができる支援があったらいいなと感じています（小）。
- 親が子どもとのかかわりを持てるように一緒に取り組める何かがあれば、親も子も理解しあえると思う（中）。
- 両親ともに仕事に出られている家庭が増え、子どもが家庭でどのように過ごしているかが把握できていない状況が多々あるのでそこへの支援はできないのか（中）。

(3) 保護者・学校支援

このカテゴリー内の回答（質問項目 A.「今の『学校』にどのような支援があるとよいと思いますか」に保護者が答えたもの）を、i) 授業に対する要望、ii) 学校をより開かれた場にしてほしい、iii) 教員の多忙化への支援、iv) 児童生徒に寄り添う支援に分けて整理した。全般的に、設問が調査者の意図とは異なる受け止め方をされて、「学校に対して必要な支援」というよりも、「学校が実施してほしい支援」と解釈されたと思われる回答が多かった。

i) 授業に対する要望

学校の授業のあり方に関する意見である。

- 高学年は、習熟度別で、授業してほしい。分からない子は、分からないまま…できる子は、タイクツ…では、両者にとって良くない（小）。
- 授業でわからない所を本人がわかるまでじっくりと教えてもらえるとよいと思います（小）。
- クラスの中で学力にかなり差が出ていると感じます。補講などがあればいいなと思います（小）。
- 土曜学習を増やし、勉強の進み方をゆとりがある様にするべき（中）。
- 塾に頼る授業が無くなるように、放課後を利用しての補習授業等を行い、基礎学力の底上げをできるような支援があると良い（中）。

圧倒的に多いのが、授業に対する不満と要望である。要約すると、家庭学習や塾通いが必要ないように、学校できっちりと教えきってほしい、着実に学習が定着するような手だてに対する要望である。学習の遅れに対する個別指導や補習の要望も多い。

ii) 学校をより開かれた場にしてほしい

学校をより開かれた場所にしてほしいという要望も見られる。子どもが安心して遊べる場所として解放する、保護者が足を運ぶ機会を増やす、地域の子どもと大人が交流できる場と機会を提供する、といった意見である。

- 学童に入っていない子でも、親がむかえに来るまでの時間に宿題をできるような部屋があれば助かります (小)。
- もう少し、保護者の方が学校に出てこられる方法 (懇談会など) があるとよいと思います。参観日もとても参加される保護者が少ないです (小)。
- 親が参加する学校行事はなるべく土曜日にしてほしい。授業参観など (中)。
- 放課後や休日、安全に遊ぶ場所がなく、結局子どもたちはゲームにスマホ等に流れてしまっています。放課後や休日、安全に遊ぶ場所として学校を使わせてほしい。その管理を先生方にとというのは無理な話なので支援があればいいのに…と思います。夏休みのしおり等に“外で元気にあそびましょう”という文字を見る度,”どこで?” と思ってしまいます」 (中)。

iii) 教員の多忙化への支援

教員への支援を求める意見である。

- もう少し先生たちに余裕をもたせてあげられるといいなと思います。仕事の量もすごく多い中で子どもたち、しかも度々いろんな意味で難しい年頃なので…。行事を見に行っても先生たちのピリピリ感が伝わります (小)。
- 先生の仕事を少なくし、子供たちともっとコミュニケーションを取れるようにしてほしい。担任だけではなく、他の先生もいろんな子供と接する時間があれば、気の合う先生に相談が子供たちもできて良いと思う (小)。
- 子供達にはひとりひとり良い所があり、そこを認めてもらうと、本当にがんばるのではないかなと思う。しかし、今の現状ではそこまで担任の先生に余裕があり、みてくれてはるなとは思えない時がある。子供達もそれを感じており、相談しやすい雰囲気はない。どのクラスにも、副担任もしくはボランティアの先生が1人つけれたら、子供達にもっと目配りができ、先生達も子供達とふれ合う機会が増えるのではないかなと思う (中)。
- 新任教師等へのアドバイス、補助の先生を増やす。先生の時間や精神的な負担を減らす (中)。

学校に必要な支援としては、教員の増員を望む声は多い。なかでも、担任の負担を減らす、あるいは担任とは話しにくいことを話せる相手といった意味合いで、副担任を置くことを求める声が多い。常時教室には複数の教員が入れる体制を求める声もある。教員が定期的にカウンセリングを受けることができるシステムという提案もあった。

iv) 児童生徒に寄り添う支援

児童生徒の思いや声を聞く機会と人材を求める声である。

- 1人1人の生徒と個別にゆっくり話せる時間を設けてもらえると、1人で悩んでいたりする子供の気持ちをゆっくり聞けるのではないかなと思う（小）。
- 子供たちが気がるに学校や家庭での悩みを相談出来るカウンセリング室が、いつでもあればいいと思います（小）。
- 先生たちが子供ひとりひとりに目を配る余裕がないと感じる。（中略）学校に「あたたかさ」が欲しい。また、校内に生徒の相談窓口などあるとよいと思う。（いつでも立ち寄れるような場所・人）（中）。
- 不登校の子供さんを支援するスタッフが常駐しサポートするシステム。特に先生、家庭、行政など必要に応じてまわりの資源もまきこんで支援する様なソーシャルワーカーが学校に1人居ると良い（中）。
- 普通学級に軽度の発達障害（アスペルガー等）をもつお子様が増えているように思います。適切な教育を早目に行うことでそのお子様達の精神状態も改善に向かうと思います。先生方がそのようなお子様への対応の仕方の教育を勉強すべきだと思っています（中）。

問題行動、発達障害など、特別支援を要する子どもに対応する担任外の教員の配置を求める声は多い。教員が子どもたちとじっくりと関われる時間を確保してほしいと願う声は多い。同様に、スクールカウンセラーなど、子どもが気軽にかつゆつくりと気持ちに耳を傾けてもらえる場を学校に求める声も多い。学校に「あたたかさ」が欲しいという厳しい指摘もあった。

(4) 保護者・家庭支援

このカテゴリ内の回答（質問項目 B.「今の『家庭』にどのような支援があるとよいと思いますか」に保護者が答えたもの）を、i) 子どもとのつながりの支援、ii) 保護者に対する子育て教育の支援、iii) 子どもの安全な居場所、iv) 経済的支援、v) 保護者と学校とのつながり、vi) 保護者の孤立化を防ぐ支援、vii) 子育てに対する社会全体の目に分けて整理した。

i) 子どもとのつながりの支援

子どもたちと保護者のかかわりの少なさを懸念する意見である。

- もっと子供との時間を作れればと思います（小）。
- もっと時間があればいいな…といつも思います。仕事から帰ると子供達との時間の前にやらなければいけない事が多く、関わってあげれない。子供達も、宿題や習い事でコミュニケーションをとる時間が少ない（小）。
- 今の家庭は両親が働くというのが普通になってます。母親が家庭にいない分、子供とのかかわりが減り子供を見るという事も少なくなっています。もう少し、親が子供や学校に目を向ける時間が増えれば良いのと思います（中）。
- 共働き家庭が増え、本当にみんなでいっしょにご飯を食べる時間などない…。そんな時間を作るように支援してもいいのでは…。前回中学でお弁当の日があったがとてもいい経験でした。朝から台所に息子といっしょに立つのもいいものでした（中）。

ii) 保護者に対する子育て教育の支援

子どもたちに対する保護者のかかわりのあり方に懸念を抱く意見である。

- 各家庭の親が子供に関心がなさすぎる。自分で自分のことをできない子供や自分の意志や考えをいえなくて親をなめていたり、反抗したりしている子供が多いと思う。宿題などを、業者にたのむ親がいたり考えられない親がいるのは、世の中が悪くなってきている証拠だと思う (小)。
- 親学の講習。支援するばかりでなく親の精神的自立が必要であるのではないのでしょうか (中)。
- 地域や学校などの他者との関わり、自分たちでよりよい生活をするために務めをはたす事の大切さを子どもがうまれるころから、伝え、そういう場を設けること。子どもがうまれるから親になるのではなく、「親になる」ということを自覚させるプログラムが必要と思う。子どもの教育の場は学校だけでなく家庭にもあるということを自覚してほしい (中)。

他方で、家庭のことは、各自がきちんとすればいいのであって、支援など必要ない、社会に対して甘え過ぎであるという厳しい意見もある。

iii) 子どもの安全な居場所

子どもたちの安全な居場所を求める意見である。

- 学童保育してもらえる場所を増やしてもらいたいです (小)。
- 共働きの家庭が多いようなので、下校時や休日等子供達を見守るなどの支援があるといいのかと思います (小)。
- 習い事をさせてあげたいのですが金銭的にむずかしく、学校では、習い事をしている子供達の中に入れず、1人での事があるようなので、少し悲しく思います。家庭の問題ですが、学校や地区で、気軽に習える…子供達が集まれる場所が欲しいです (小)。
- 中学生もまだまだ子供ですが、親が仕事で遅くなった時一人での事になります。しかしまだまだ自分で正しい判断のできない年頃。何か支援があればと思います (中)。
- 子どもたちの居場所の確保があれば安心して働けますが、長期休暇は心配です (中)。

iv) 経済的支援

経済面での支援を求める意見である。

- 学校の完全無料化 (塾生活でお金がかかりすぎる) (小)。
- 成績に関係なく学費免除とか、奨学金制度が受けられる支援があるとよいと思います (小)。
- 「親の経済力＝子供の学力」になりがちなので、できれば経済的な支援 (小)。
- 現在の学習塾は、受講費がとても高く、教育の経済格差はかなり大きいと思います。放課後学校での学習会のようなものがあればいいのに…と思います (中)。
- 子供と長い時間すごすために、働かなければ生活できない家庭への金銭的負担を減らす (中)。

経済格差が学力格差，進路格差に繋がることへの懸念の声は多い。教育費の負担が下がれば，働く時間を減らし，子どもと関わる時間が増えるという好循環を期待する声も多い。

v) 保護者と学校のつながり

学校とのより密な連携を求める保護者の意見である。

- もう少しフランクにおつき合いできたらと。気を使われすぎて、簡単に相談もできません（小）。
- 個人懇談会はあるが、15分程度で短く、心配事や不安など話しづらい。電話相談など気軽に先生と話せたらいい（小）。
- 共働きの親が多くなってきているのにも関わらず、運動会以外の行事はすべて平日に行われており、参加したくても参加できない。もう少し、土日の行事を増やす等してほしい。もしくは平日に行われている行事を土日に行うなど工夫してほしい（小）。
- いじめ等が起きたときに、すばやく家庭と連携をとって早く解決できるようにしてほしい（中）。
- 中学生になると、学校での様子がほとんどわからなくなりました。学校であったトラブルも、こちらから連絡をして話ができただけの状態です。もう少し連携をとれるようにしてほしいです（中）。

子どもの様子が分からない、学校での様子を知りたいという声は多い。もっと学校に足を運びたい、担任と話をしてほしいという声が多い。

vi) 保護者の孤立化を防ぐ支援

保護者がつながることのできる資源や場を求める意見である。

- 核家族が多く、家庭自体が閉ざされた場所になり、子供が犠牲になっている事もありえるこの時代において、母親が助けてほしい時に助けてもらえる場がもっと明確に、開かれたものになればと思います（小）。
- 気軽に話ができる人がいるといいなと思う事がある。また、色々な知識を持っている人からアドバイスを受けられるといいな、とも思う。自身が病気などで、家事や育児が出来ない時に頼れる所があればいいなとも思う（小）。
- 人とのコミュニケーションが取れずに一人で悩んでいる親などの相談、アドバイス、話し相手などの支援活動（中）。
- 悩みが有る無しにかかわらず、日常の生活について話し合える場（先生、仲間づくり）が増えると良い（中）。

vii) 子育てに対する社会全体の目

社会全体が子育ての問題に取り組むことを求める声である。

- 共働きが多い中、子ども達との一緒にいる時間も少なくなってきました。もっと、社会が、子育てに対して、やさしくなってくれば、ゆとりもできるのでは？（中）。
- 共働き家庭には「時間」の支援を。休暇や時間給の取りやすさを（中）。
- 子どもの時から格差社会で、貧困が貧困を生むスパイラルをどこかで打ち切らないと、日本社会の発展はないと思います。家庭のどこにメスを入れるかは難しい問題で、親の支援・子どもの支援などさまざまな課題があると思います（中）。

4. 考察

以上にその一端を示したように、今回のアンケートの自由記述の回答には、多くの生々しい声が寄せられた。紙面の制約のために実例を十分に取上げることができなかったが、とりわけ、保護者からの回答には、表面的な観察からは窺い知ることの難しい、悲鳴、怒り、切実な願いといったものが、肉声を通して伝わってくるかに思われるようなものが多く見られた。そうした回答を繰り返し読むこ

とで、記述された言葉そのものには直接盛り込まれていない、あるいは言葉になりきらない、回答者の思いを想像させられることがたびたびあった。

ここでは、4つの回答カテゴリーそれぞれについて簡単な考察を行った上で、教師と保護者の回答傾向をつきあわせることで浮かび上がってくる相互の齟齬について考察する。

(1) 教員・学校支援について

教員の多くが、日常の業務をこなしきれない実態があること、それがきめ細かな学習指導や生徒指導面を行う上でマイナスの影響を及ぼしていることがうかがわれる。「とにかく人手が足りない」という悲鳴のような回答からは、もはや時間のやりくりの工夫では解消することが困難な、教員の業務量をめぐる絶対的な問題が現場で生じていることがうかがわれる。

このような状況の中、生徒指導面、とりわけ特別な支援を要すると考えられる児童生徒への支援が、十分に行き届いていないことがうかがわれる。長期的には、教員養成段階からの教員の力量向上が必要であるとしても、短期的には教員とは異なる専門性の高いスタッフによる児童生徒への直接支援、および教職員への間接支援が急がれる状況にあると考えられる。また、今回のアンケートへの回答に見るこの問題への懸念は、小学校教員の回答に比べて、中学校教員の回答が少ない。特別支援に関する教員への研修を求める回答は、むしろ中学校教員の方に多く、このことから、中学校では、潜在的に特別な支援を要する生徒たちの問題が、二次的に、見かけ上異なる別の生徒指導上の問題として現れ、対応されている可能性が懸念される。

教員の多忙化が、教員の心身のストレスを強めている様子もうかがわれる。ストレスを抱え込んでいる教員への支援への直接的及び間接的支援が、大きな課題である。また、教員以外の多様な専門家や人材の配置を求める意見は、「チームとしての学校」の今後を考えるうえでも重要である。今の学校に求められるスタッフの見極めと、その効率的かつ効果的な配置が極めて重要であると考えられる。

(2) 教員・家庭支援について

時間的に、あるいは経済的に、余裕のない保護者の姿が、教員にもはっきりと捉えられていることがうかがわれる。その結果として、児童生徒たちと保護者たちとのかかわり合いが薄くなりがちであり、児童生徒たちにとって家庭が成長と休息の場として十分に機能しない状態にあることを懸念する声が、非常に多いと言える。

しかし、その一方で、後で保護者によるアンケート回答と比較してみるように、そうした家庭の状況を、保護者の意識のあり方の問題として捉えている教員がけっして少なくないことがうかがわれる。“教育に対する保護者の関心が薄い”“家庭の教育力が低下している”といった趣旨の回答はその典型例と見ることができる。このことは、見方を変えれば、そうした考えを持っている教員においては、近年、保護者がそうした状況におかれている背景や社会構造の問題が十分には考えられていないと言えるだろう。

保護者に対するこのような見方は、「多忙化する学校」という現状に対して、今回のアンケートの回答においては、抜本的な異議申し立てと建設的なオルタナティブの提案が少ないことも深く関連していると考えられる。つまり、少なくない教員が、日常の業務遂行においてゆとりを失っていく中で、目の前の現象に振り回され、そうした現象に対する対症的な対応を追求するあまり、事態が一層悪化していくというプロセスが起きていても、そうした事態ないしプロセスを省察的に捉

える機会を持てていない可能性が示唆される。このことは、学習指導であれ、生徒指導であれ、保護者との協働であれ、そこで日々生じてくる問題や課題を深く理解し、本質的なことがらを考え抜くという省察力を、現場の教員から少しずつ確実に奪っていくことにつながりかねない。

(3) 保護者・学校支援について

調査者が想定していた質問の意図からは外れた回答ではあるが、学校の授業に対する要望が非常に多いことの背景には、保護者用アンケートの質問B「今の『家庭』にどのような支援があるとよいと思いますか」への回答にも見られるように、経済力や家庭内の保護者の時間的・精神的なゆとりの有無によって、学力格差が生じることに對する強い不安と、実際に学力格差が生じていることに對する強い不満があることが推測される。

保護者のゆとりの無さが教員によってはっきりと認識されていたのと同様に、教員の多忙化は、保護者の目にもはっきりと捉えられている。そうした現状への支援を願う保護者の思いの背景には、教員の目が子どもたち一人一人にまで細やかに届いているかを心配する、あるいは届いていないことを不満に思う、そうした気持ちがあることがうかがわれる。授業に対する要望も含めて、教員に子どもたちとしっかりと向き合ってくれることを望む（いささかの後ろめたさも混じった）保護者の願いが感じられる。

学校に「あたたかさ」を求める声も目立つ。保護者から見て、学校がどこかよそよそしく感じられていると言えるかもしれない。教員の児童生徒や保護者とのかかわりが、人間味の薄い、及び腰に見える形式的なものになっていると感じている保護者は少なくないようだ。学校現場が心掛ける丁寧な対応が、少なくない保護者からこのように受け取られているとすれば、皮肉なことである。

以上、いずれにおいても、保護者が学校に求めること、願うことには、その言葉通りの表面的な内容だけでなく、保護者ならではの思いがあることを、当然ではあるが、教員はけっして軽視してはならないだろう。

(4) 保護者・家庭支援について

保護者が子どもたちにかかわるゆとりがないことを懸念し、そこに支援を求める声が圧倒的に多い。家庭で子どもたちと関わるゆとりを生むような支援、ひとり親や共働き等で、子どもだけで過ごす時間が長くなりがちな家庭に對し、子どもたちが安全に過ごすことができ、見守られることができる支援等である。親子でかかわる時間を持つゆとりが欲しいけれど、親も子もそれぞれに生活に追われているという悲痛な声が聞こえてくる。

地域の中で孤立しているように見える保護者、居場所が無くて一人で過ごす子どもたちや、いわゆる問題行動に走る子どもたちの姿に、強いもどかしさと危機感を持っている保護者が多いことが、回答からうかがい知れる。そうした声は、地域のコミュニティの連帯につながる動きを生む可能性と同時に、価値観が異なるように見える保護者の間の分断を広げかねない危うさをもはらんでいると思われる。それぞれの家庭が置かれている状況についての理解は、教員と保護者の間に一部の齟齬があるのと同様に、保護者同士の間にも齟齬を生じている部分がある。

貧困の問題が拡がりを見せる中で、家庭内でそれが具体的にどのような困難さを引き起こしているかについて、具体的にうかがい知ることのできる回答が多数見られた。なかでも、もっとも深刻なのは、子どもたちと保護者とがかかわり合う時間の剥奪と、子どもたちにとってのさまざまな経験の剥

奪の問題である。こうした剥奪の問題は、個々の保護者、個々の家庭の意識や努力の問題ではなく、社会のシステムや構造の問題として捉える視点がなければ、こうした問題に根本的に切り込むことはできないと考えられる（阿部，2008，2014）。

(5) 総合考察

これまで見て来たように、教員の認識と保護者の認識とが一致している点が多い。他方で、双方の認識にズレが見られる点もあった。認識にズレがあることそのものは問題ではないとしても、そのズレが教員と保護者の間の相互理解に基づくコミュニケーションを難しくしてしまうとすれば問題である。そのような状況では、本来なら、十分にコミュニケーションをとることができれば解決可能な問題も、いたずらに困難な問題になってしまいかねない。

教員の多忙化が一因となって、十分な教育活動が難しくなっているという認識は、教員と保護者との間で基本的に一致していると思われる。しかし、保護者の声に、授業や学習指導に対する不安や不満が多いことの背景にどのような課題があるかは、教員には十分には認識されていない可能性がある。また、学校が保護者に対するアカウンタビリティを重視せざるを得なくなっている近年の潮流が、保護者の目には「よそよそしい態度」に映っている面もあり、相互の信頼関係を深層レベルで掘り崩す結果を招きつつあることが懸念される場所である。

保護者に経済的、時間的、心理的なゆとりがないこと、保護者同士が孤立しがちなことに対する懸念は、保護者と教員との間で基本的に一致している。教員は、家庭内で生じている児童生徒の生活態度や生活習慣の問題を、子育てに対する保護者の理解不足や認識不足と捉えがち傾向があるが、保護者は主として経済的な問題に起因する就労環境の問題として経験している例が多く、ここには認識の大きな齟齬が生じている可能性がある。総じて、教員には、保護者が抱える経済的困難さが、先に見たようなさまざまな剥奪へと連鎖しがちであることが、十分には見えておらず、適切に理解できていない恐れがある。スクールソーシャルワーカーの大田（2015）は、その経験から、「生きていくこと自体が困難である人たちがいることを、教員に理解してもらうのはなかなか難しい」場合があることを指摘している。家庭の状況に関する不十分な理解に基づく、児童生徒への指導や保護者とのコミュニケーションは、教員の側が問題の本質的な所在を見誤り、的を外したものとなるリスクがあることに注意しなければならない。

総じて、保護者のアンケートの回答には、教育行政の関係者や学校関係者が熟読すべき内容のものが多々含まれている。保護者が子どもの成長に対して感じている不安、生活を維持するために子どもに十分に関わることができないもどかしさ、こうした背景の理解が切実に求められていると考えられる。

そうした理解に不可欠なものは、当事者同士である教員と保護者の対話である。教員の多忙化の問題と拡大し続ける貧困の問題に、それぞれ対症的にのみではなく根本的に向き合い解決の道を模索するためにも、教員と保護者との間の、そして地域社会との相互理解を深める方策、そのための場と機会を作る具体的な動きを生み出すことが、喫緊の課題になっていると考えられる（暉峻，2017）。

5. 結語

教員と保護者の間に横たわる齟齬の原因およびチーム学校の障壁の理由となっているものは何であるのかをアンケート調査の記述部分から検証した。その結果、両者とも仕事や生活に余裕のない状況があること、そしていずれもお互いの厳しい状況を理解し合っていることを確認することができた。背景に近年の学校は、アカウンタビリティの観点から、保護者理解やその対応には相当の知恵を絞り、労力も費やしていることがある。しかしながら、そうした努力に反して、図らずもお互いのコミュニケーションはうまくいっているとは言いがたい。筆者らは、本調査結果の分析を通して、その原因を両者の間の不十分な「対話」にあるのではないかと見ている。

ただし、両者の間の齟齬の解消に着目し、「対話」が不十分であることを示せたとしても、そこで帰結させてはならない。それをいかに学校現場で実現していくのかについて、具体的な方策を示すことが求められているのである。

そこで今後は、学校現場で教員と保護者の間の隙間を埋める役割を果たしているスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーにインタビュー調査を行い、チーム学校に向けてどのような対話が両者の間で可能なのか、さらにはそうした対話の場や機会をどのように創り出せばよいのかを探っていきたいと考えている。

付記

本研究は、科学研究費平成 27 年度 基盤 C 15K04227「生徒指導の福祉的課題（貧困・虐待等）に関する研究」による研究成果である。

引用・参考文献

阿部彩『子どもの貧困 - 日本の不公平を考える』岩波書店、2008 年

阿部彩『子どもの貧困Ⅱ - 解決策を考える』岩波書店、2014 年

秋田喜代美「子どもの学びと育ち」佐藤学他編『岩波講座 教育 変革への展望 1 教育の再定義』岩波書店、2016 年、pp.97-150.

角田豊・片山紀子・小松貴弘『子どもを育む学校臨床力』創元社、2016 年

片山紀子・角田豊・小松貴弘「チーム学校に向けた現代的課題 - 生徒指導的観点から - 」『京都教育大学紀要』第 130 号、2017 年、pp.35-47.

大田なぎさ『スクールソーシャルワークの現場から - 子どもの貧困に立ち向かう - 』本の泉社、2015 年
ドナルド・A. ショーン著、柳沢昌一・三輪健二訳『省察的实践とは何か - プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、2007 年

暉峻淑子『対話する社会へ』岩波書店、2017 年